



企画にあたって

原田和昌

(東京都健康長寿医療センター副院長)

わが国の平均寿命は男性81.3歳、女性87.3歳であり、世界に冠たる長寿国となった。それに伴い高齢化率の増加も著しく、1960年頃の5%程度から、2019年には28.4%にまで上昇した。今後、わが国の高齢化はますます進んで、2030年には75歳以上の人口は約2,200万人となり、かつてどの国も経験したことのない超高齢社会が来ると予測されている。また、喜ばしいことかどうかは別として、「人生100年時代」も目前に來ている。これは、近年における脳心血管疾患や悪性腫瘍の治療の進歩によるところが大きいと考えられる。高齢になるほど心血管疾患は増加することから、現在の循環器診療において75歳以上の「高齢者」を診ることは確実に増えている。これからは、日本老年医学会が提唱した、90歳以上の「超高齢者」の循環器診療が日常的になるかもしれない。

そこで、Heart View 誌で、「超高齢者循環器診療の術 — 先生のお悩みはなんですか？ —」という特集を企画することになった。ここでいう超高齢者は、必ずしも90歳以上という定義にはこだわっていない。高齢者、超高齢者で増加する心不全に関して、心不全の薬物治療や非薬物治療（TAVI や MitraClip®）の適応、左室駆出率が保たれた心不全（HFpEF）の治療と老人性アミロイドーシス、また、臓器老化の表現型である併存症のなかでも特に重要である、CKD、貧血、悪性腫瘍、認知症について考慮すべきこと、さらに、超高齢者の心房細動の抗凝固療法やポリファーマシーなどについても、各分野のエキスパートの先生方にわかりやすくまとめていただいた。

これらを理解するためには、単に循環器疾患の知識のみならず、老化に関する深い知識を必要とするため、これまであまりよい教科書が存在しなかった。しかし、本書に書かれている内容を踏まえて超高齢者循環器疾患の診断と治療をすれば、明日からの循環器診療が医師にとっても患者にとってもよりよいものとなると考える。すなわち、循環器診療が、疾患をただ「治す医療」から、「身体機能や生活機能を保持し、健康長寿を実現する医療」に変えられるものと信じている。